

近ごろ、認知症の高齢者を狙った悪徳商法が相次いで報道されている。

家族であってもほとほと疲れ果ててしまう。

不要なリフォーム工事の契約をかわし、あけくの果てに、借金のかたに家までとられてしまう人まで出た。認知症にまつわる悲劇はこうした事件に

ある調査によれば、高齢者虐待の被害者の八割に認知症があった。家族からすれば、自分たちの生活を破壊する高齢者こそ、自分たちへの虐待者に見えてくる。一方、施設

研究室から

大學はいま

限らない。
もっとも一般的な
は、認知症のお年寄りを
かかえた家族が陥る介護地獄であろう。同じことを夜昼なく話しかけられたり、「ものを取りられた」と何度も訴えられれば、

に入れば、介護の質には
ピンからキリまである。

認知症が怖いのは、認
知症になつてから自分の
身の振り方を決めようと
しても難しいことにあり、おおかたの人は、「そ
うなつたら家族がどうに
かしてくれるだろう」と
か、「考へても仕方がな
い」と、その問題から逃
げてきたが、何の準備も

しないでいては、よっぽど運が良くないかぎり、「認知症になつても安心して暮らせる老後」は転がり込んでこない。

ではどうすればいいのか？ それを考える出発点を確認したい。それは、「認知症になつた人もその家族もおのれの人がらしく生きていける方法があるはずだし、もしないなら作らなくてはいけない」ということだ。実際、認知症になつても、適切な介護があれば「普通に暮らせる」のだ。元気なうちから認知症の何たるかを知り、それに適した介護の仕方を知り、そうした介護を支える仕組みや制度の現状と問題点を知る努力をしよう。

(岐阜大学教育学部社会科教育講座教授 小林月子)

認知症には適切な介護が必要



小林月子教授